CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

“Rappaccini’s Daughter” 一解釈
—絶世の美女ビアトリスをめぐって—

野　呂　　浩*

I

今回分析する文学作品は，19 世紀アメリカ・ルネッサンス期の作家，ナサニエル・ホーソーンの短編小説 “Rappaccini’s Daughter” である．この作品は，*United States Magazine and Democratic Review* 誌に 1844 年に発表された後，1846 年に，*Mosses from an Old Manse* に収められたナサニエル・ホーソーンの代表的な短編の一つである[1]．

リチャード・フォグルは，この短編はナサニエル・ホーソーンの作品中もっとも難解な物語であると述べている[2]．それを実証するかのごとく，研究者達が，様々な解釈を発表してきた．性，宗教，科学の視点から読まれる場合が多いが，いずれの視点からの読みも，作品全体の解釈としては十分納得のゆく説明とはならないようである．

物語の舞台は，イタリアのパドヴァである．自然界には存在しない毒を薬草から創ろうとして自分の薬草園を所有し，研究している病的な顔立ちのラパチーニ博士がまず登場する．その博士の美人の一人娘ビアトリスに，南部のナポリから北東部の都市パドヴァに来た青年医学生ジョバンニは一目惚れしてしまう．ビアトリスは，全身有毒の娘であり，飛んでいる蝶が彼女に見つめられて死に，彼女の手の中で新鮮な花が萎れてしまう程である．ジョバンニも，やがて，自分も同じ毒に犯されていることに気付く．パドヴァ大学医学部のバグリオーニ教授から，美しい毒殺者ビアトリスとは一切関わらないようにと再三忠告されたにも拘わらず，ジョバンニはビアトリスの魔力的魅力を払い除けることが出来ずに逢瀬を続け，最終的には，バグリオーニ教授からもらった強烈な薬，解毒剤でビアトリスの毒を消そうとする．その薬は解毒の役目を見事に果たすが，そもそも毒そのものであったビアトリスは結局死ぬ羽目になるという，何とも奇怪で悲惨な結末になる話である．

この物語の主題を解明するためには，毒の本質，全身有毒の人間がビアトリスといううら若い乙女であることの意味，ジョバンニの正体などが明らかにされなければならないのは当然である．さらには，ジョバンニに向かって，あなたの方こそもっと毒があったのではないかというビアトリスの今際の叫び，物語冒頭の序文との絡みなどにも分析のメスを入れなければならない．

II

これまで，この作品に関して，ナサニエル・ホーソーン研究者による夥しい数の解釈が発表されてきた．そうした研究の全部を限られた紙面で扱うことは到底無理なので，代表的な解釈の幾つかをしばらく批判的に検討することにしたい．

まず，“Rappaccini’s Daughter” をエデンの園神話との絡みで眺める読み方である．確かに，作品の中にも，ラパチーニ博士の庭は現代のエデンであろうかとか，また，ラパチーニ博士はアダムなのかとか，あるいは，紫の花をつけた特別な灌木が庭の真ん中にあり，庭の中央に噴水があってそこから水が吹き出し，水は四方に溢れ出ているとの，聖書の創世記 2 章を思い起こさせるような箇所などもあり，物語はエデン神話の枠組みを借用しているようである．

仮に，毒の植物が繁茂しているのが現代世界のエデンであると理解し，ラパチーニ博士が現代のアダムと看做すならば，イヴに相当する女性が物語には見当たらないのは何か特別な意味があろうか．また，ジョバンニがアダムとしたら，ビアト

* 本学基礎・教養，助教授
1998 年 9 月 16 日受理

リスがイヴとなり，ラパチーニ博士は神になろうか．あるいは，ビアトリスはアダムであるラパチーニ博士の娘とでも理解したらいいのか．ビアトリスは毒性植物と姉妹のような親しみを持って接するが，ラパチーニ博士はまるで，恐ろしい獣にでも近付くかのごとく恐る恐る，しかもマスクや手袋をして近付く姿をどのように理解すればいいのか．ラパチーニ博士の研究上のライバルであるバグリオーニ教授は，上手にジョバンニを誘惑して解毒剤を与え，自らは手を下さずに，巧妙にビアトリスを殺害する悪魔の象徴である蛇のような存在であることは間違いない．いずれにしても，ラパチーニ博士は神なき世界の神であるということ位は分るが[3]，登場人物同士の関わりを考えても，また，毒そのものの本質を解読せずに，作家が生きた時代の世界をエデンの園神話を借りて，戯画化し揶揄しているだけであると簡単には片付けられまい．

次に，よく聞かれる読みは，女性の性が男性の愛と恐怖の対象になる物語との解釈である[4]．生命と健康と活力に溢れんばかりに見える美しい花のごとき乙女ビアトリスに，若き医学生のジョバンニが一目惚れし，心奪われてしまう．しかし，やがて，ジョバンニの内面には，秘かにではあるが，ビアトリスを自分の思うがままに操りたい欲望が芽生えてくる．解毒剤をビアトリスが飲むのを許すのは，彼の理想とする，全く毒気のないビアトリスを実現するためなのである．父親のラパチーニ博士も自分の毒の研究の生きた実験台にビアトリスを使う．また，将来，学問上のライバルとなり自分の地位を脅かしかねないビアトリスを恐れて，バグリオーニ教授は彼女の存在を忌み嫌い，消そうとする．この3人の男性は，いずれも，恋人，父親，学問上のライバルとして，女性であるビアトリスを異様に意識し，抑圧する役割を果たし，ビアトリスはそうした男どもの哀れな犠牲になる運命を背負わされた女性のセクシャリティーの象徴と読む．このような読みに繋がる要素が十分あることは認めるが，しかし，恋愛には当然，女性が登場しなければならないが，学問上のライバル，並びに父親の実験の対象が女性でなければならない必然性もなく，どうしても頷きがたい部分が残ってしまう．従って，男性諸君は，ビアトリスが女性だからこそそれぞれの関わりをもつというのではなく，まず，最初に，むしろ，ビアトリスはなぜ毒娘という女性でなければならないのかを押さえる必要がある．

さらに，よく取り上げられる解釈は，科学と倫理の問題を取り扱っている小説とみる読みである．ラパチーニ博士もバグリオーニ教授も共に医師という科学者である．パドヴァ大学は，ガリレオなどとも関わりのある科学，医学分野の殿堂なのである．ジョバンニも若き医学生なので，科学者の卵である．そして，ビアトリスは科学実験の餌食となる女性である．科学実験の対象としてのみ患者に関心があり，科学的知識を芥子粒程でも増やすためには，人間の生命の犠牲を何とも思わない，空恐ろしい危険人物ラパチーニ博士の狂気は作品から誰でも納得出来る事実である．そうしたラパチーニ博士が研究しているのは，自然界には絶対に存在しないような猛毒を創造することであり，何やら妖怪じみた医者，科学者である．解毒剤を飲んで死ぬビアトリスは，医学実験の犠牲者と看做す．従って，狂気の科学者と哀れな犠牲となるビアトリスの物語，つまり，科学と倫理という古くて新しい避けて通ることの出来ない永遠のテーマを扱っているのだと，表面的に読むと誰でもそう結論づけたくなろう．だがしかし，ナサニエル・ホーソーンという作家が，科学上の諸問題を特に問題視する小説家とは考えにくい．常軌を逸脱しているような諸々の行動をする科学者を文字どおり受け止めると，誤読に落ち入る危険性が高いナサニエル・ホーソーンの作品が多いのである．

この作品を，1495年に南部の都市ナポリで流行した梅毒との絡みで解釈する興味深い特殊な読みもある[5]．南部の都市ナポリから来たジョバンニは，梅毒感染者であると読む．勿論，本人が最初からその重大な病気を自覚していたかどうかは定かではないが．そうした病気を職業柄見抜く力が備わっているラパチーニ博士は，ジョバンニが梅毒患者であることを既に見抜き，彼と自分の娘を

結婚させようとする，いわゆる同種（毒）療法を試みる．

ジョバンニは，熱に浮かされるような感じで，ビアトリスやその他の自分の周りの世界を眺めるが，この熱は明らかに梅毒の一症状である．梅毒が背景であれば，ジョバンニが，ビアトリスを悪魔とみるべきかそれとも天使と見るべきかの苦悶も分る．彼の性的欲求を満たしてくれる女性天使であるが，しかし，梅毒患者ビアトリスとの一度の抱擁が，一生の悲劇へと繋がる故の震えおののく特殊な恐怖も十二分に理解出来る．やがて，ジョバンニも，毒に汚染された体であることに気付くことにはなるが．

バグリオーニ教授も，ビアトリスが梅毒患者であることは知っているようで，ジョバンニが，彼女と，適切とは言えないような関係に陥ることにでもなれば一大事であると考え，王を毒殺しかねないインドの全身有毒娘の話なども聞かせながら，ビアトリスには絶対に近付かないように忠告する．ところが，そうしたインドの話は，ジョバンニは子供っぽいお伽話だとして全く耳を傾けないので，結局は，バグリオーニ教授自身が，解毒剤という薬品をジョバンニを介して，ビアトリスに飲ませ，間接的ではあるが殺害してしまう役割の一端を演じることになる．

ビアトリスの父親であるラパチーニ博士は，梅毒患者であるかどうか断定は難しいが，近親相姦が暗示されているかのような雰囲気からすると，娘に自分の梅毒を移したとも考えられる．あるいは，毒性植物に恐る恐る近付く姿から判断すれば，父親は全く梅毒の感染者ではないとも読める．

梅毒が作品の主題であれば，何かその病気を暗示するような言葉などがないか作品を注意深く探してみると，ジョバンニが，自分の体が毒化した責任の一切はビアトリスにあると怒り狂ってビアトリスに向かって吐いた言葉に，「教会へ行って入り口の聖水に指を浸そうじゃないか．僕達の後からやってくる者は，疫病にかかったように死んでしまうだろう」(124) という箇所があるが，激情に駆られてのなじりのその言葉から，即，梅毒を意味すると断じるのは少々無理があろう．仮に，ビアトリスが梅毒患者であると読むと，物語では，真のビアトリスは天使であるとも描かれているので，そうすると，この作品は梅毒賛歌小説になってしまうではないか．大変ユニークな解釈であり，それなりに説得力と迫力もあるが，まさに，梅毒小説とでも読まなければならない程の極度の恐怖感，緊張感をリアルに描いている作家の力量が大きいと読むべきであろう．

III

さて，ナサニエル・ホーソンがこの作品を執筆する際に参考にしたであろう素材に，作品の謎を解くヒントのようなものが見つけられないであろうか．物語の素材の研究も既に幾つかあり，ラパチーニ博士の庭園は，オランダの有名な医師の広大な薬草園の記述を参考にしたものであり，ラパチーニ博士の娘ビアトリスは，その薬草園を所有していたオランダ一の美人と言われた娘がモデルであると考える研究もある[6]．また，ビアトリスという名前は，イアリア詩人ダンテの初恋の女性の名であるかもしれない．作品にも，ジョバンニが下宿した家の先祖の一人が，ダンテによって，その地獄で永遠の責苦を受ける者として描かれたという箇所などもある訳だし，また，ダンテの恋人が若くしてこの世を去るという点なども似ている．あるいは，イタリアの貴族の娘，ビアトリス・チェンチをその名に重ね合わせているとも考えられまいか．彼女の悲劇的な生涯には，ナサニエル・ホーソーンも大分興味があったようである．父親との近親相姦事件で，父親を殺害してしまう悲劇のヒロインがビアトリス・チェンチであり，如何にも，ナサニエル・ホーソーンが興味を持ちそうな事件でもある．もし，そうならば，ラパチーニ博士が自分の娘を全身有毒化する恐ろしい実験は，近親相姦の象徴とも読める可能性がある．

全身有毒という着想は，トーマス・ブラウンの『伝染病的謬見』(*Pseudodoxia Epidemia*, 1646) の第7巻17章をヒントにしたことは間違いなかろう．そこには，インドのある王侯からアレクサンダー大帝におくられた猛毒の美女の話が書かれてあるからである．毒草庭園の構想は，エデンの

園の変型であろうが，ミルトンの『失楽園』やスペンサーの『神仙女王』をも参考にしたのではなかろうか．それに，様々な植物の種の混合から造り出される毒草は，トーマス・フェアチャイルドの植物混成の実験からヒントを得たのかもしれない[7]．

ラパチーニ博士と，バグリオーニ教授の2人の医師の病気治療に対するアプローチの違いは，19世紀マサチューセッツ州の医学界の歴史的論争に基づくとの説もある．つまり，その当時の医学の考え方として，二つの相反する考えがあった．異種療法と同種療法である．作品の中で，バグリオーニ教授は解毒剤でビアトリスの毒を消そうとしているし，ラパチーニ博士は，ビアトリスの毒を，さらに強い毒で，つまり，同種（毒）療法で治療しようとする[8]．

この他にも，様々な素材を参考にして作品を纏めあげたとの研究もあり，それぞれ説得力もあり参考にもなるが，ナサニエル・ホーソーンは間違いなく，この素材を用いてこの作品を書いたのだと断定することは困難なようである．それに，出典がこれであると考えると，どうしてもその素材から作品を解釈したくなろう．つまり，ダンテの恋人を登場させたと考えると悲哀物語になるだろうし，父親との不適切な関係とすると近親相姦の物語，そして，医学上の治療法ならば，科学（医学）小説となろう．素材からヒントを得て，作品の解釈が出来る場合もあろうが，この作品の場合には，そのいずれをも扱っているようで，いずれでもないような作品である．ただ，素材であろうと考えられるものが誠に多いことだけは事実である．それが，作品を解釈する難解さの一つの理由とも言える．個々の素材から作品の主題を探るのではなく，多くの素材という部品で組み立てられた物語全体の伝えるメッセージを読みとることの方がより肝要である．

IV

随分遠回りをしてきたが，いよいよ，全身有毒のビアトリスの正体と毒の本質を，まず物語を詳細に眺めるアプローチで突き止めたい．

ビアトリスの頭の上を飛んでいた蝶がビアトリスに見つめられているうちに，突然震えて息絶える．こうした邪視（邪眼）は何を意味するのか．だだ，毒素の殺傷力の強さを物語るだけなのか．トマス．アクイナス（1225～74）は，邪視は魔女の印であるとし，その有毒有害な眼差しによって弱い存在に死をもたらすことさえあると明言している．死神の化身とも言える存在で，有毒な邪視で見つめられた対象は死の運命を甘受しなければならなくなる[9]．なお，邪視には，二種類あり，無作為の邪視と作為的邪視がある．ビアトリスの場合には，無作為である．亡くなった蝶の上に身をかがめながら十字を切る位であるから．こうした邪視の最古の記録は，紀元前3000年頃の楔形文字で書かれたものにも見られるほど長い歴史を有する．勿論，イタリアなど地中海諸国にもこうした迷信のようなものはあった[10]．従って，ビアトリスの本質は魔女，もしくは死神そのものであると読まなければならない．この点を押さえると，かなり，物語全体が分りやすくなるのではなかろうか．ビアトリスの毒素そのものは，死（神）そのものであり，死の世界へ誘うためにあらゆるものの息の根を止める殺傷力を持つ魔力である．

ビアトリスが魔女であるならば，ラパチーニ博士は魔女の父ということになる．博士は，青白い顔をした医学者で，患者を治療の対象としてよりは，実験の対象としてのみ関心があることは指摘済みである．無限の知識と知恵を手にする代償として，魔王に魂を売り渡す老学者ファウストを思わせる人物である．様々な種類の薬草を栽培している園の意味を，ビアトリスが魔女であるという文脈で読むならば，薬草の知識とそこから得られる魔術的薬は魔女の特徴なので，これもまた，魔女の物語であることを裏付ける証拠の一つと受け止めて差し支えない[11]．薬（毒）草園には，いろいろな種類の植物が混じり合い，いわば姦淫を犯しているので，もはや，神の創造物とは思われないとか，まるで蛇のように地面をくねくねと這っているものもあるなどと書かれてある．崩れた大理石の泉水の残骸は，人間世界のはかなさを表わし，絶えず流れ続ける水は精神の永遠性を象徴するの

ではないかとも解釈したくなるが，触ると命に関わる毒樹，水もごぼごぼという無気味な音をたてて湧き出ていることなどからは，近親相姦を暗示し，かつ，怪しく異様な雰囲気の永続性を醸し出すための舞台装置の役割を果たしていると言えよう．樹は，本来，自然界の王者であり，あらゆる生命，豊穣，神秘的な知恵と結びつき，自ら命を吹き込み，魂を持つ存在と信じられてきたが[12]，この作品では毒樹として描かれていることに注目すべきである．

魔女というと，一般的には，帚に乗って空を飛ぶ醜悪な老婆のイメージが強いが，魔女は，うら若き美女か，老婆のどちらかでなければならない．並みの美貌だけでは魔女にはなれないのである．もっとも，状況に応じて美女にも老婆にも変身する特殊な魔女もいるそうだが．この作品では絶世の美女ビアトリスの姿で登場している．絶世の美女と父親との近親相姦の暗示も，これまた，二人とも魔女の資格を十分に満たす人物であることの証明である．近親相姦は，魔女の世界では絶対禁止事項どころか，めずらしくもない至極当然の魔女らしい行為，魔女であることの証明なのである[13]．

ビアトリスと父親のラパチーニ博士はどうやら魔女，魔男であり，植物園も，魔女の薬つくりの場所であることは証明出来たと思うが，これは本当に間違いのない現実，彼等の実像なのであろうか．物語の中程までは，余程注意して読み進んでも，果たして，実像なのか，虚像なのか，まるで読者を翻弄するかのような箇所だらけの感がある．

ジョバンニが下宿の窓から見下ろした博士の毒草園に，若かったころでさえ決して心の温かさをあらわしたことさえなかったであろう，なにか心の病気にでも犯されているようなラパチーニ博士と，溢れんばかりの生命と健康と活力に満ち満ちているような眩いばかりの美女，ビアトリスが見える．読者もついそのように理解したくなるが，そのような受け止め方を疑問視せざるを得ないような説明があちこちにちりばめられている．例えば，「ジョバンニの空想は，庭を見下ろしているうちに病的になってしまったに違いない」(97)とか，さらには，「朝の太陽の光のなかで庭園を眺めてみると，庭園はまことに現実的な，至極当たり前のものに過ぎぬことを知った」(98)とも説明されている．ラパチーニ博士，ビアトリスの二人のあの異様さはどのくらいが二人の特質によるものなのか，どのくらいが奇跡を考え出すジョバンニの空想力によるものか判断がつかないとも続く不思議なコメントを読むと，一体読者はどれが本当の現実，姿なのか全く分らなくなってしまうではないか．

くどいようだが，もう少し，似たような例を探すと，蜥蜴かカメレオンの一匹の小さな生き物が，手折られた花の茎から落ちた一，二滴の雫で，痙攣を起こし動かなくなったとあるが，しかし，ジョバンニが見つめていたような遠い所からは見えるはずはなかったとの文章もある．飛んでいる蝶が死んだときも，そう見えたとあるし，ジョバンニが差し上げたみずみずしい花が，ビアトリスが玄関の中に姿を消そうとした時に，その新鮮な花が既に萎れはじめているように見えたが，この場面でも，また，ジョバンニのいる遠いところ（下宿の窓）から，萎れた花と新鮮な花とを見分けることなど出来るはずもなかったと，語り手の説明が書き添えられているのである．

このように眺めてくると，読者は目眩みがする程であろうが，ビアトリスを魔女と見，ラパチーニ博士を異様な人物として眺め，毒草園の怪しい様相も全部ジョバンニの目でみた世界であって，日光の下に照らし出せば，ジョバンニの見た世界は全部，虚像世界と化する可能性があることになろう．物語の後半部ではどのような展開になっているのであろうか．

ジョバンニは，ビアトリスの手の中で萎れた花束や，死んだ昆虫のことがやはり忘れられず，ビアトリスの肉体の毒ははたして現実のものなのかを試す決定的なテストをする決心をする．二，三歩はなれた位の距離から見て確かめたら間違いはなかろうと考え，彼女に渡す花を買いに急いで花屋に行き，まだ朝露の玉に飾られている花束を買った．ところが，しばらくして，何と自分の手の中にあるその花がもう萎れはじめているのを見

て，身震いするのである．皮肉にも，自分が毒に汚染されていることを，自分自身の体で体感する羽目になったのである．そして，好奇心から，つまり，毒の威力を試してその結果を見たかったのであろう，ジョバンニは，天井からぶら下がるもっとも元気な蜘蛛に有毒な感情を十分染み込ませた息を吐きかけると，その蜘蛛は，足を痙攣させてぎゅっとすぼめると，死体となってぶらさがってしまったのであった．このような場面には，物語の前半にあったような，ジョバンニのいる距離からは視覚で確認出来るはずがないなどという奇怪な補足説明らしきものは一切添えられていない．自分の眼前で自分の毒で蜘蛛が死ぬのだから，そのような説明は不要で，成立しないのは当然である．

ここには大逆転ともいえる展開がある．作中には，ビアトリスがジョバンニの体内に微妙な毒を滲ませていたとのさりげない一文もあるが，しかし，ジョバンニに，毒を自分に移したのはお前だろうと，厳しく問い詰められたビアトリスは，決して自分ではなく，それは父のせいだと叫ぶ．最後のビアトリスの死の場面に登場するラパチーニ博士は，それとなく自分の魔力でそうしたことを否定しないような感じである．これでは，また，読者が判断に苦しみ，ジョバンニの肉体が毒化された経緯を明確に特定することは到底無理である．だがしかし，ジョバンニ自身の肉体が毒化したことだけは否定出来ない現実となった．この後，彼は，毒々しい嘲りと怒りを込めて，自分の血管を毒で満たしたのはビアトリスのせいだと激しく責め立て，殺してしまいたい衝動にかられ，最終的には，解毒剤を飲ませた結果，ビアトリスが死んでしまう結末を迎えるのである．このような物語の急展開を読むと，今や，ジョバンニこそが生物学的な身体だけでなく，心まで毒化（毒々しい感情）されて，恐ろしい魔男となり，作為的邪視を持ち，用意周到な計画的殺人とは言えないまでも，結局は，解毒剤でビアトリスを死に到らしめる，死神そのものに変身したことが誰の目にも明らかになったではないか．

このように検討してくると，物語の大部分はジョバンニの視点から書かれており，ラパチーニの娘というよりは，ジョバンニの物語としてもよさそうな気がする位である．ジョバンニに，インドの毒娘の神話を聞かせ，解毒剤を託し，かつ，ビアトリスが死んだ後，ラパチーニの実験の結果はこんなものかねと嘲笑うバグリオーニ教授も，娘の死際に，一息でどんな強いものを倒す力が惨めなのかと娘に語るラパチーニ博士も，勿論，それなりの役割を果たす必要な登場人物ではあるが，彼等はあくまでも脇役であり，ビアトリスは勿論だが，ジョバンニの存在と意義も大きく重い．

非常に控えめな書き方ではあるが，ビアトリスの実像らしき特徴が，ジョバンニと比較されながら描かれている．ジョバンニは，どうしても，自分の目で見る世界が中心であり，かつ，性格的に完全主義者タイプというか，毒の存在を認め，毒と共に生きることは難しく，特に他者に毒を見る場合は絶対にその存在を許せずその生命さえ奪いかねない狂気を宿した人物である．其れ故か，一旦は，自分もビアトリスも一緒に解毒剤で毒を消そうと提案するが，しかし，ビアトリスの自分が最初に飲むのであなたは結果を待ちなさいとの言葉を受け入れ，つまり，彼女に意図的では無いにしても最初に飲ませ，その結果であるビアトリスの死を静観，観察するのである．彼がすぐに彼女の後を追って自分の命を断ったとはならないのである．作品中に，ジョバンニは深い心の持ち主ではないと述べられてあるが，その通りであると言えよう．彼と比較して，ビアトリスは，たとえ，肉体がジョバンニから見て毒化されたものに見えても，精神と本質は天使であると書かれてある．死んだ昆虫に対しては十字を切って祈るし，何やら永遠の時をも見つめている女性である．ジョバンニの激情をも包みこんでくれる宗教的静けさ，女性らしい優しさも彼女にはあると説明されている．ビアトリスがジョバンニの激怒が多少治まった時に，2人の間には，彼も自分も超えることの出来ぬ淵があることを感じとったというのは，こうした2人の世界の違いを意味しているのではなかろうか．ジョバンニの，どちらかというと彼の空想の色がついた特殊な色眼鏡による認識が多く描

かれている，いわば，実体を判別しがたい薄闇が支配するような作品の中で，こうしたビアトリスの特徴は一条の光となって輝いていることは間違いない．

V

ナサニエル・ホーソーン自身の先祖の中には，アメリカの17世紀の魔女裁判に判事として関わった者もあれば，また，母方の先祖には，結婚して自分の妻がいるにも拘わらず，実の姉2人と近親相姦の罪を犯した人物がいるという忌まわしい歴史がある[14]．ただ魔女のように見えただけにすぎないような理由で，魔女として訴えられ，捕らえられ，処刑された多くの弱き女性達，また，そうした魔女を喜び勇んで何の躊躇もなく，裁き，処刑に賛同する男どもの判事達，教会指導者達，指導的立場にあった科学者達，さらには，近親相姦などの痛ましい，恥ずべき事件などが歴史として刻まれた初期のアメリカ史を，ナサニエル・ホーソーンという作家が一時も忘れず，呻吟していたことは否めない事実である．従って，魔女として見られる絶世の美女ビアトリス，近親相姦の匂いが濃厚なラパチーニ博士，溢れんばかりの生命と健康と活力に満ちたビアトリスの魅力の虜になりながらも，結局は，毒を孕む魔女の存在を許せない完全主義者，迫害精神の化身を思わせるジョバンニ，それに，医学部の名声故，ヨーロッパの各地から若人が集まったパドヴァ大学医学部の[15]，バグリオーニ教授（実在の人物ではない）などが物語に登場してくるのも頷けよう．

一方，16，17世紀頃の南ヨーロッパは，ペストが猛威を振るっていた時期でもあった．1524年，ミラノとその近郊の死者は14万人程に達した（既に指摘した作品中の疫病という言葉は，このペストを指している可能性もあろう）．こうした疫病の流行は魔女どもが引き起こしたと噂され，多くの魔女が逮捕されて，生きたまま火で焼かれた歴史的事実がある[16]．こうしたイタリアの歴史をも視野に入れるならば，ビアトリスもジョバンニもアメリカの歴史的象徴以上の広がり，深みを持つことになるではないか．そして，ビアトリスの死際の，ジョバンニに向かってあなたの方にこそ最初からもっと毒があったのでないかとの言葉も，ナサニエル・ホーソーンの先祖の迫害により犠牲となったアメリカマサチューセッツ州セイラムの魔女達の叫びのみならず，アメリカを超えて，ヨーロッパの魔女達へとも繋がる響きを持つことになろう．なお，ビアトリスの死際の，地面にくずおれながら，恐れられるよりは愛されたかったのよとの言葉も，下手な私の分析，解説を必要としない，死際の魔女の遺言であろう．そして，これが，一番重い意味を孕むとすれば，物語は，間違いなく，ビアトリスの物語となる．

最後に，物語の冒頭にある序文との絡みで少し考えてみたい．ナサニエル・ホーソーンはよく自分の作品に序文を書く作家で，その序文が物語の序文の役割を果たすこともあれば，あまり関係なさそうな場合もある．この物語を序文と絡めた研究は無いようであるが，むしろ，序文の内容から物語の意図を考えると，また，新たなメッセージが垣間見えるようである．

ナサニエル・ホーソーンは，序文の中で自分を，フランス人作家オーベピーヌ氏と名乗り，自分は，超絶主義者達と大衆の好みに訴える文筆家との中間という不幸な位置を占めていると告白している．そして，自分の作品は，読者が適切な視点から眺めれば輝かしい作家の作品と同じようになろうが，そうでないと，途方もない戯言に見えてしまうとも述べている．

大衆小説を好む読者を対象として書く執筆家の特徴はわざわざ私が解説するまでもなかろう．もう一方の，超絶主義者達の思想の特徴は，人間や自然を神格化し，悪の非実在を信じることである．勿論，ナサニエル・ホーソーンが彼等の思想をどれ程正確に深く理解していたかどうかという問題はあるにしても，人間も自然界も決して，神性だけが宿る存在ではなく，魔性をも合わせ持ち，時にはその魔性に振り回される存在となる人間の赤裸々な姿の小説を，善のみの実在を信奉する超絶主義者達と，大衆の知性と同情に訴えかける文筆家達に献上したとも読めるではないか．

ナサニエル・ホーソーンは，数多くの素材を用

いて，アメリカ史のみならず，ヨーロッパ史にも見られた魔女歴史の実態をナサニエル・ホーソーンなりに解釈し，自分なりの魔女歴史観，主張を，自分の家系の忌まわしい汚点や，彼なりの人間観と重ね合わせながら，魔女問題を扱っているとの露骨な文章もなく，いや，ただの一度たりとも魔女という言葉を使用することなく，一見，戯言にしか見えないありふれた悲哀物語の中に，かなり巧妙かつ大胆に秘めていると結論づけたい．しかも，序文との絡みで読めば，作品を献上する相手まで考えて執筆した作品であることも分る．

今回の私なりの分析でも，作品の隅々まで解明した自信は到底持てないが，少なくとも，物語の序文に書かれてある，適切な視点の一つであり，難解な謎を少しは解読するヒントとなろう．

注

1) 使用テキストは，Nathaniel Hawthorne, "Rappaccini's Daughter," *Mosses from an Old Manse, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne, X* (Columbus: Ohio State Univ. Press, 1974) 以後テキストからの引用は，引用の後にページ数のみを記す．
2) Richard H Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark* (Norman: Univ of Oklahoma Press, 1964), p 91
3) Frederick C Crews, "Giovanni's Garden," *American Quarterly*, 16(1964), p 418.
4) Richard Brenzo, "Beatrice Rappaccini: A Victim of Male Love and Horror," *American Literature*, 48(1978), pp 152-64.
5) Car Marie Bensick, La Nouvelle Beatrice. *Renaissance and Romance in* "Rappaccini's Daughter" (New Brunswick: Rutger University Press, 1985), pp 93-112.
6) C E Frager Clark, Jr, ed, *The Nathaniel Hawthorne Journal* (Michigan. A Bruccoli Clark Book, 1984), pp 175-78.
7) 元田脩一『アメリカ短編小説の研究』南雲堂，昭和42年，pp 93-97.
8) M. D Uroff, "The Doctors in 'Rappaccini's Daughter,' "Nineteenth *Century Fiction*, 27(1972), pp. 61-70.
9) 高橋義人『魔女とヨーロッパ』岩波書店，1995年，pp. 39-41.
10) ローズマリ・エレン・グイリー著，荒木正純／松田英監訳『魔女と魔術の事典』原書房，1997年，pp 171-73.
11) 『魔女と魔術の事典』p. 412.
12) 『魔女と魔術の事典』p. 111.
13) 森島恒雄『魔女狩り』岩波新書，1978年，p. 88
14) Oliver Evans, "Allegory and Incest in "Rappaccini's Daughter,' "Nineteenth-*Century Fiction*, 19(1964), pp 185-95.
15) 田中一郎『ガリレオ』中公新書，1995年，p. 46
16) 『魔女狩り』，p. 79.